

ゴ
ル
ド
ン
女
史
著
菅
原
教
造
譯
述

美
學
講
話

全
十
八
講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

第十一講 建築の話

— 目 次 —

概説——建築は抽象的——確立せる形の隋性——建築の表現性——裝飾の原則——風景と建築——建築の型式數種——
埃及式——希臘式——ビザンチン式——ゴシック式

概説

建築は彫刻、繪畫及表面圖案と違つて、一層實用的藝術と認められて居ります。人の使用の爲めに建築は空間を圍み且擁護する務めを致します。私的生活・公民生活・宗教崇拜等、各種の要求を満たし、同時に眼を歡ばすと云ふ一般的要求にも添ふのが、建築美術の二重の目的であります。建築は純粹裝飾の如く或目的物の模倣ではなく、目的物それ自身であります。然も亦純粹裝飾と違つて、成就すべき特種の目的を持つて居ります。其の人生との實際的交渉にも拘はらず、建築は抽象藝術として知られて居ります。

建築は抽象的

ヘーゲルの術語に依れば、藝術は觀念（具體的の世間的過程を意味す）を官能に表現するものであります。藝術の最古の形式は觀念の不完全な半面的現示で象徴的且抽象的なものであります。建築は人間の情緒及事件をうつし出す藝術よりは間接的で、またそれ程自由にならぬ點に於て抽象的であります。建築は今一つの意味、即その觀念表現性より、一層建物の實際の構造に關係の多い意味に於ても抽象的であります。一建築物はそれを成して居る質料や線が、眞直に其の用務を果たさうとして、模倣的の意味に

乏しく、又はその目的から理由なく外れる事が少ない時には抽象的であります。美術的建築の要素は質料、空間及線で、我等が日常經驗する視覺世界を抽出したものであります。例へば垂直の柱身シャフトは、或意味に於てはいろ／＼な自然の形に似て居ります。即樹木の幹の様でもあれば、花の莖の様でもあり、動物の足の様でもあれば、人間の胴の様でもあります。柱身は是等凡てに似て居り、是等凡ては、直立で且重量を荷ふ事の出来る點に於て互に相似て居ります。同じく水平の棟木は、横倒しの樹幹、長い平たい石、洞穴の屋根又は床に似て居るといふのは、是は單に棟木が横になつて居て寒暑風雨を防ぐと云ふ點からであります。垂直の柱身も、水平の棟木も、共に許多の自然形に共通して居る要素を代表して居ります。即ち共に集合グループの普遍的特質——一方は支持、一方は庇覆——を、集合中の或材料をそのまま踏襲せずに、具體化して居るものであります。此の意味に於て、兩者は共に

抽象的形式であり、集合の共通若くは普遍的觀念を代表してゐるものであります。柱身及棟木の如き簡單な幾何的形體は、人がそれに聯結する情調は、凡てそれに似た物の過去の聯想から來て居るにも拘はらず、特殊の狀況とは全く懸けはなれて居るので、支持及反復の觀念以外、別に何物を代表してゐるとも、何物を模倣して居るとも思はれないのであります。原始建築家は、木の枝なり石なり、有り合ふもので小屋を支へたり覆ふたりしました。併し支持と擁護の觀念が、有り合はせの形と離れる、即單個の石亦は材と獨立すると同時に、建築家はその材料に對して批評的となり、其の不適切な所を心で削る様になり、且自分の觀念を一層直接に抽象的に履行することを想像し始めます。

確立せる形の情性

建築的發明家は、あら

ゆる他の發明家の如く既存の事物から自分の特種の目的に必要な原則を選択致します。併し時には

既存の形は、藝術家がそれから抽出することが出来ず、傳説的の中から論理的要素を分拆することが出来ぬ程、多大の暗示を持つて居ることがあります。その爲に古い形、又は形の變化は、もはや入らぬ所にまで繰り返されることが往々あります。埃及の比較的小さいピラミッドの中には其の入口の楣が「明らかに木造を思ひ起させるものもある。如何となれば、大抵の場合、二つの柱を結びつける圓筒狀の幹形の棟があり、部屋々々の天井までも木材を結び着けた様にしてある所がいくらかもある」とリュブケは申して居ります。希臘のドリヤ式の寺院が木造時代の面影を存して居る事は、よく書物に出て居ります。クレーンは「ドリヤ式の寺院は、かの原始的構造のあらゆる特徴的細部をそのまゝ留めて、單に木造を大理石に替へ美しく大きなものとしたるに過ぎず」と申して居ります。赤羅馬人が希臘の圓柱を模寫して、其の弓形の門や天井を結びつけた時、圓柱の頂いて居つた縁を

も幾分残しておきました。ステーサムが申しました通り「彼等には……圓柱は長押なしでは不完全に見え、従つて圓柱からすぐアーチを出す代りに、圓柱の上に適宜な長方形の長押をはさんで、アーチなり圓天井なりをそれから出した」のであります。是等は、古い形を何の考へもなしに踏襲した例であります。これで、具體的藝術品は必ずしも構造上の必要、又は意識的美術的選擇に依つてのみ、説明しつくすことは出来ぬと云ふ事が分ります。併し建築家が進むに従つて、美術思想に依つて古い形式を批評的に分拆し、構造上、又は新しい形の裝飾上、必要な部分のみを保留致します。

建物の表現性

建築はいろ／＼の方面に於て表現的であります。建築は氣候狀態に會ふ方法であり、且その嚴烈に對する反應でありますから、第一に氣候狀態を表現して居ります。屋根・軒蛇腹・雨滴石等は、雨を運び流す目的に應じ、北方の建

物の切立つた破風は、雪を落とします。熱い日をさへぎらねばならぬ南方の建物は、比較的窓の間が小さく、之に引換へて北方の建物は、比較的窓の空間が大きくて、霧の深い日の薄い状況にあてはまる様にしてあります。

建物はそれを作る職工の社會的條件をも反映する事が出來ます。ラスキンは、或建物の細部が相似て居るか居らぬかを見れば、各職工が自由に腕を振ふことを許されて居るか、又は唯の器械扱ひにされて居るかの度合を見分けることが出來ると云つて居ります。其の言に「希臘の建築の如く、凡ての大斗だいとが同じ様で、凡その剗形くわがたに變化が無ければ、職工は全く器械にされて居るので、……若し又ゴシック藝術の如く、設計上、實施上限りなく變化があれば、職工は全然自由を與へられて居つたに相異なる」云々。古代建築等は、多く構想は簡單で、大きさが非常なので、従つて多數職工が少數考案家に屈服して居ることを表現し、多勢

の智力の聯合より寧ろ多量の蠻力を示して居ります。ゴシック建築はこれと反對に、單なる分量的構成物では無くて、多くの細部にわたりて想像力を示し、專制的命令にぼんやり従ふのとはちがひ、頭を働かせ興味をもつて共力した結果を見せて居ります。

宗教の用途に充てられた建物は、其土地の信仰の種類を表現して居ります。僧徒の職務が、神聖なもの又は非常に重要なものと思はれて居る寺院では、神壇の位置に力を入れます。さう云ふ寺の主體は、聖場として高く築かれ、勾欄で圍まれた神壇の端まで、通ふ通路になつて居ります。又一方に諸の祈禱が祭儀の主部になつて居る寺では、芝居又は聽講所の形を取る傾向があり、長い通景は淺い圓いものになります。回教寺院には禮拜所へ導く通景のないのは、回教徒は禮拜の如何なる部分をも神聖現して居ないからであります。

建築は彼のゴシック式が向上心を表はし、希臘式

が正理と安靜とを表はし、埃及式は神祕と畏怖を表はして居ると云はれる様に、建築家の情操なる實質なりを表現することもあります。建築が或情操を表現すると云ふのは、建物の各部各線は建築家がその情操を表はさうと意識的に意匠したと云ふ意味ではなく、建物全體として或感情の影響を受けて考案されたものだと云ふに過ぎませぬ。ゴシックを例に惹くならば、ゴシックの寺は全體として意識的に宗教的崇拜を表現せんとしたもので、斯様云ふ高塔を作るべく余儀無くした構造上の必要は決してありませんでした。けれども高大なものを作らんとする決心の成つた時に、それに達せんが爲めに尖直のアーチを使ふ構成的必要が生じたのであります。斯様に尖直アーチは、始めは唯の工藝上の要求でありました。出来上つた作品を觀る人には、建築物の表現は線及質料の生理作用に及ぼす影響に依ります。上に述べました通り、或線は累堆せられた情味をもつもので、従つてそう

云ふ線が或建物中優勢を占めて居る時には、其建物は全體として觀者に特殊の影響を與へます。斯う云ふ有意味の線を新しく配合しますと、或建物に獨特の情調を與へる事が出來ます。

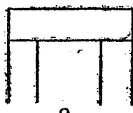
最後に建物はそれ自身の構造及各部の設計の原則を明白に示して居れば、表現



的と云はれる事も申しておかなければなりません。建物の主腦

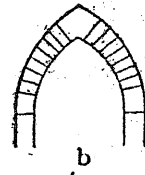


の線は、普通建築家が決定した機械學上の問題及それに依つて成し遂げた物理上の手段を隠すより寧ろ顯示すべきであります。以下五六の例に依て、原則を表はしてゐる線と、隠してゐる線との間の相異が分りませう。茲に示した圖の a、b、c に於て



は、内側の線は各自、楕圓アーチ、尖頂アーチの線を成して居ります。併し三つの場合は皆一様に、支

柱間の空間には、垂直的壓力のみを強める横材が架してありますから、構造上の法則即ち楣の法則



は同一であります。線と同時に、

構造上の法則に於ても穹窿に作るには、此の圖a、bに於けるが

如く、側面の壓力を強める^{ヤリ}迫石

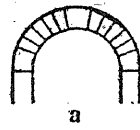
で穹窿を造らなければなりません

ぬ。これを反對の側から説明し

ますと、楣の線に枠組を被せて

眞の穹窿の様に見せた建物の如

きは、一般に不當な手法とされ



て居ります。同じ理由で、外見が圓屋頂で、内部

の天井が平面では不釣合であります。表現的なら

しめんが爲めには、外面に依て幾分内面をも推測

し得る様にしてなければなりません。若し建物の

一部分に他の部分をも表現させやうと云ふなら

ば、各線を通じて或一致と様式全體に通じて一貫

した所がなければなりません。細部が全體の線に

反響して、建物全般の特性と一致した様な調和があれば、各部が全體を表現して居ると云へます。

ラスキンは建築の表現の問題を殆ど道徳上の事の様にして論じて、大理石と見せ掛ける贗造物など

の如き材料を傳ふのは悪いと申して居ります。又

唯だ見えない所だからと云ふので、建築の一部を

仕上げずにおくのは不正直であり、手工の裝飾の

代りに機械製のものを用ゐるなどは「許すべから

ざる、純然たる虚偽」であるとも云つて居ります。

斯ういふ説を正しいとする證據はどこにあります

うか、建築と眞言との交渉とは何でありますか、

建築に於ける眞實とは、外見と構造上の事實との

一致に外ならぬと云ふ事が出来るのであります。

併し、此説には多少取捨の餘裕があるので、上手な

偽物、全く眞物らしく見えるもの、眞物であつて

も好いが偶々偽物で、あるにすぎぬものと、一方

目で贗造が分かるものとは、區別をし無ければな

りませぬ。もし大理石の似せが間然する所なく出

泰で居て、當然大理石を使ふ所にそれをを用ゐてあるならば、其の結果は美術的に悪くはありませぬ。けれども第一種の際立つた不自然がすぐ目につく様な虚構は、大抵不快なものであります。此種の虚構の例は圓屋背の時を見受けます。ロンドン聖ボヤ少に寺院の外側の圓屋頂は、石の代用の木材だと云ふ事で、内側の石造の圓屋頂から出て居る圓錐石の上に建てられて居ります。全體の上に重い石の塔燈が持たせてあり、此の燈籠は外面の圓屋頂が背負つて居る様に見えますが、實は隠れた圓錐石で支へてあります。駁すべきは、此の外側の圓屋頂位の大きさと形とのものでは、其の支えをゐる様に見える燈籠を實際到底支へ切れるものではないと云ふ點であります。亦フローレンティン寺院の如きは内外圓屋頂の外殻の間にかくれて居る鎖が無くて、ほんとにあのまゝの形ならばとも立つてゐる筈がありません。目に見える鎖より見える扣壁を用ゐた方が、圓屋頂構造上健全な

原則であります。故に建築家の目から見れば、以上二つの圓屋頂は、共に不可能事を爲して居ると見えます。舞踊家の場合に、單に實際姿勢の好い許りでなく、見物人からさう見える様にもじなげればならぬと申しました通り、建築も又實際堅固な許りでなく、堅固に見えなければなりません。さうすれば眞實なしく受けとられますし、目にも不自然には映りませぬ。全體がしつかりして居て、奇蹟的に見えない様にと云ふのが、建築に必要な唯一の眞實であります。

裝飾の原則

原始藝術に於ては、建物はよく繪畫や野蠻な俗美な物で、こたく飾られるものであります。さう云ふ物は、全體の印象を豊富にするつもりであるに拘はらず、却て折角飾らうとした建物の美を減ぼす様な事があります。これは、さう云ふ物が單に建物に附けてあるにすぎず、理想物に合體してゐないからであります。今少し發達した藝術では、嵌め込むむかひあてはあ

とか云ふ必要が感ぜられる様になり、遂には建物にふさはしく且必要だと思はれるものゝみ裝飾と認められる様になりました。調和よく飾るには、二つの肝要な法則を守らねばなりません。即ち第一には、既に建物の中にある形状が模倣に依て強められ美しくされる「反復」の法則と、第二には、反對の性質の線なり形なりを使つて、或形状に感じの好い平衡を興へる所の「對照」の法則であります。第一法則の例は、圓柱の溝に見えて居ります。即ち彫溝が幾筋となくあつて、柱身の垂直線に勢ひを添へて居ります。剝形・軒蛇腕・圓天井の格縁等も、同様な構成線を著るしく且反復して居る一例であります。第二の法則の例は剝形の連續せる直線に、捲いた木の葉や花をあしらつて變化を來す等をいふのであります。「對照」は無論單なる「相異」を意味しては居りません。例へば石彫りの花を反復した飾り邊があるとして、その中へ何か變化を來したいと望めば、小さな色硝子でも、錫の

兵士でも入れて、變化を求めれば求められぬこともありませんが、併し花とさうした物とは餘りに懸けはなれて居るので、とても對照と云ふ感じは起りません。石の花の邊飾りにほんとうの對照を來すには、最初の材料を決してはなれず、花に適當する形、たとへば花と反對の方向に捲く事の出来る木の葉なり卷鬚なりをえらばねばなりません。これで相異を來すことが出來ます。或類似を心にして居る相異が對照であります。對照は原物に對して模倣と同様に嚴密な關係を持つて居ります。

風景と建築

建物の裔飾は、建物の性質に合はなければなりません。が亦次には建物自身調子を合はせて行かなければならぬ風景の爲めの裝飾とも認められて居ります。建物は或範圍に於ては、模倣と對照とに依て其の四圍の自然の性質を映します。希臘の寺院はその適當な位置と關聯して考へれば、印象の強さを非常に増して來ます。岡の起伏が涯しなく小歇みない變化を爲して居る

希臘では、建築は安靜を旨として、風景に平穩な簡素を添ふべきであります。アゼンスのアクロポリスの如き岩勝ちな砦を完美させて居る寺、又はデルフィやエギナの如き高所遠所を見渡して居る寺は簡單で安靜でなければなりません。希臘の風景を統轄するに最も緊要な特性は峻嚴と平衡とであります。其の反對にゴシックの寺は平地に於ける唯一の高處なので、出来るだけ高く聳え立つて其の過多な建築形状の變化を見せて居ります。城の建築は岬や絶壁など、調和して居ると云ふのは、銃眼の強い線がさう云ふ場所の高低凹凸のある性質を助け、それを完成してゐるからであります。小屋の場合には屋根の線を附近の丘や周囲の樹木の傾斜に應ずる様にすることも出来ます。さう云ふ調和の出来る場合には、小屋は全風景に美を添へます。

建築の型式數種

建築法は、楯、圓穹窿及尖頂穹窿の三様に分けるのが普通であります。今日

迄歐洲には少しの間隙もない特異の様式とは、希臘・ビザンチン・ゴシックの三様式より外に無かつた」とムーアは云つて居ります。楯建築は、希臘の寺院に最も完全に代表されて居り、ビザンチン式は、圓穹窿と圓屋背との使ひ方を最も好例證し、ゴシック式は、炭頂穹窿と高い破風との用法を示して居ります。以上の三種と今一つ埃及式とを下に説明して、各模範的線と空間の配置とが、觀者に及ぼす情緒的效果の特質を究はめませう。そして是等の建物が刺戟する感情と、その刺戟の仕方とを明白に知り度いと思ひます。

埃及式

埃及の寺は、長さが輻の三倍もある廣大な長方形の平面圖の上に建つて居ります。

獨逸の美術史家リュブケはその外見について「暗鬱な凹面の軒蛇腹を載いて居る巨大な斜の壁がその周圍をとりまいて全體に嚴肅な神秘的な性質を與へて居る。寺院の壁の單調な面を亂す窓もなければ、柱廊があるでもない」と云つて居ります。信

着は巨重な門を過ぎて、大きな圓柱の長い列を圍む大廣間や内庭をとほつて行きますと、遂に柱の

並木道が最奥まで通つて居り、そこに神々を祀つた清淨な、神官達しかはいられぬ小さな奥まつた部屋があります。建物の外の部分は凡てこれに向ひ、これに進む路になつて居ります。建物全體の大きさと、無限の堅牢さと、内部の強大な圓柱と配置の壯大とは、驚異と畏怖の情操を起させるには申分ありません。大きな斜の壁は、ピラミッドの如く、永久不滅の力を暗示して居ります。

神秘の印象は唯に密閉された、非交通的な外面のみでなく、神殿が遙に奥まつて居て、宏大な建物の長さ全體を行かなければ近附く事の出來ぬ事實に依て養はれます。埃及の寺院はあらゆるものより超れて、力と耐忍とを強めて居る點に於て、古代の理想と古代の政治との表現と見る事が出來ます。これは比較的單純な觀念を大仕掛けに遂行した。即ち一人の人、若くは少數の人の考へを多數

の人の努力に負はせる事の出來る專制國では有りうちな事態を示して居ります。

希臘式

内面より外觀に重きを置いて建て

られた希臘の寺院は、その柱廊を外にして壁を内にして居る所は、全く埃及式の反對であります。希臘の寺院は又埃及のよりも小さくて緊つて居ります。たとへばパルテノンは一〇一呎に二百廿七呎、カルナクの寺は、三百七十呎に一千二百呎であります。希臘の建て方では、神壇へは一つ道しかないのでなく、方々から近附く事が出來る様になつて居ります。外面は一つの連いた玄關で、此の自由な開放的な建て方と、その中庸を得た大きさとは、禁斷的な神秘的な埃及の寺の外見に依て訴へられるとは、全然別個のものを訴へてゐると云ふ事を示して居ります。

希臘の寺院の主要な線は、力と努力との外見を變へる垂直線と、安靜を感じさせる廣い水平線と、靜平を破らずに活氣と生氣とを添へる低い破風の

斜線とであります。此の寺は非常に讚美されたもので、實に簡素の美の完全な模範であり、靜な公正を表現して居るものであります。此の建物の主要な手法は、すぐ目につきまますし、構造上の法則は、隠れる所が大びらに出て居ります。必要と思はれる線は、皆しつくり納まつて居り、且反復に依て目立つ様にしてあります。建物を支へる垂直線は、圓柱から圓柱のみでなく、柱身の彫溝にも堅筋繪様の線にも繰り返されて居ります。水平線は軒縁・十壁及軒蛇腹で強めてあります。此の建物は、その圖案の單純と明白とのために、人に依ては峻嚴と克丁の印象をすら受けるものがあります。吾等に提供するもの少く、而もその提供する所は凡て完全なる彼の簡築なる建等ほど莫大なるの無しとはラスキンの言であります。

一見簡單な此の建築のあらゆる部分には、その全體の効果との關係に對して、綿密な注意が拂はれて居ります。角々の柱は空に對してゐるので、

光滲に依つて自然に小さう見えますからそれを價ふ爲めに外のよりも稍や大きくしてあります。剗形の側面は圓の如き容易な明白な曲線を示して居らずに、巧妙に漸次に増減する様にしてあります。^{フリゲリフス}堅筋繪様の陰影は、石の端を分らぬ様に切つて、用意周到に整へてあります。精美巧緻の數々が、均合と細部とに對する卓越せる注意を證明して居ります。希臘の建築上の問題の範圍は、狭いものでありましたが、建てられたものは、何れも藝術上完全無缺と認められて居ります。

希臘式は「合理的」(少々漠然とした言葉ではあります)の建築だと前に申しました。「合理」とは建築上の色々な事に使ふ事が出來ますので、或意味から云へば、作つた目的に適應して居る建築物はいと合理的で、此意味に於ては、希臘の寺と全然性質を異にする他の多くの建物とも同様に合理的です。が若し「合理的」なる語が神秘的又は空想的なるものに反對で、且勝れて中庸

を得たものという意味するとすれば、希臘の寺院が合理的と呼ばれるのは至當であります。大きさに於ても中庸を得、裝飾は相應したもので豪華では無く、無用な變化も餘り無い證據には、最良と認められた形をどこまでも使ふので、一列の柱の大斗は皆一定して居ります。全體としては絶大な威嚴と靜安との印象を與へます。

ビザンチン式

ビザンチン式は、圓穹窿と

圓屋背との極度に發達した建築で、コンスタンティノープルのソフィア寺院の如きは、其の絶好の模範であります。正方形と圓とは力の領域であるところスキャンは申して居りますが、此兩者は共にビザンチン建築の特徴で、之に依て集中又は密實せる力を得て居ります。サンタソフィアの地形は殆ど正方形で、中央の大圓屋頂の鼓形輪は、正方形に配置した四つの大きな穹窿の上に立つて居り、方形の角と圓屋頂の輪との間の空間は、四分一の圓屋頂で蓋ふてあります。内部の効果を主として意

匠されたビザンチン建等は、その圓柱・窓間壁・圓屋頂の面・平面及び其の直線・穹窿線等から、圓部の變化を得て居ります。窓は頂が圓く、圓柱の大斗は中高で細部は全體の方案と合致し、且それを表現して居ります。圓穹窿は楣ほど峻嚴でなく、もつと輕快な線であり、ビザンチン式の内部のその如きは、輕易と彈力との感じを與へます。かう云ふ線と空間とは、廣大な優美な所があるものであります。

ビザンチン建築は、亦其の内部裝飾の華麗な點に於ても顯はれて居ります。金色の背景に對して、着色大理石と立派なモザイクとを自由自在に使用してある事は希臘式の峻嚴とも、ゴシックの沈鬱とも、別個の華奢莊麗の印象を爲すに與かつて居ります。此式は未來に對する渴望より、寧ろ現世に於ける實現の感じを與へます。

ゴシック式

ゴシック式の顯著な形態は、陣に終れる中央の大本堂と、兩側に一ツ若くは二

づゝある側道と、十字路トランプストと、高い尖頂穹窿と圓天井と、外側から穹窿を興へる控壁と、鋭い破風と、尖閣と、塔と筆狀塔とであります。猶立派に彩色した硝子をはめ、石の窓飾りで別けた窓等もあります。これら凡てが秀れたゴシック建築に必ず用ゐられてゐるのではありませんか、併し何れも充分發達したゴシック風の最大の寺院には適した要素であります。ムーアが興へたゴシック式の定義は次の通りであります。

建物の全計畫は、壁より寧ろ精妙に組織され且公然明示されて居る枠組に依て定められ、その全力も亦こゝに宿つて居る。窓間壁と、穹窿と、控壁とで出來てゐる此の枠組は、不用な壁に煩はさるゝことなく、建物のしつかりして居るのは不活潑な重壓的（一番外の迫持プロバハの外は）な所から來るのではなく、反對な力が互に制し合つて、完全な平衡を生ずる活動的な各部の正當な適合に基くので、枠組に力も充分であると等しく各部が輕快に出來

て居る。これは不活潑な古代の固定の様式とは反對の推力平衡の様式である。」

構造上から見た此のゴシック觀を補足するにラスキンのゴシックの「精神的意味」の特徴説を以てする事が出來ます。ゴシックは蠻的にして豪放、其の凸凹の繁多と完全なる仕上げの缺乏とに活氣あらはる。變化と變化に對する愛を示すは、其の裝飾的細部はクラシック美術の如く、一分一厘の相異なく反復せられたるにあらず、正確に平衡せるにもあらず、又尖頂アーチは楣又は圓アーチより更に變化に富むに徹しても知るを得べし」云々。なほラスキンは花や唐草模様が、窓飾りにも彫刻にも矢鱈に使つてある所に、自然を愛する所が見え、亦樋嘴ガイゴイル・小鬼・怪物等に例證された恠異の分子もあると云ひ、猶彼は第五の要點として、或強直性又は反撥的張力を説いて居ります。「ゴシック式裝飾は、其の尖銳強直の獨立性と、無情なる堅忍性と、常に敏快的にして瞬時も遲慢の風なき所にあり、

もし缺點ありとせばその粗奔の點のみ」又最後に
ラスキンは裝飾と細部とが多過ぎる點を希臘建築
の「尊大倨傲」な簡素と正反對の人を歡ばせんとす
る心配の結果としてそれにも意義を認めて居りま
す。

ゴシック寺院と聯關して起る氣分は、肉體の快樂
を捨て、美しい幻影を得る禁欲主義者の心持とも
比べられませう。石の寒冷と灰色、通景と陰影と
の暗鬱の中から、圓天井を成す長い線が明り窓の
華やかな色の混和した所まで眼を導きます。印象
は希臘の寺院のそれよりも一層峻嚴でもあれば優
しくもあります。西方の建物はその表はしてゐる
氣質と宗教とが違ふとほりに相異して居るのであ
ります。